



藤谷家の発掘地点と冷泉家、有終館を大学図書館より望む

今出川と 公家屋敷

鈴木重治

古絵図や古地図を広げて見るのは楽しいことである。古絵図との無言の対話を通して、多くの関心が次々とひきおこされ、それぞれの地点をさまざまな歴史の舞台として脳裡に展開させてくれる。

古絵図を含めた古記録に加えて、発掘調査によって検出される遺構や遺物は、とりわけ強烈に迫るものがあり、大地に刻みつけた人間の営みを、まのあたりに示してくれる。

今出川界隈の古絵図や発掘資料から、二、三の歴史上の舞台をひきだして、その一部にふれてみよう。

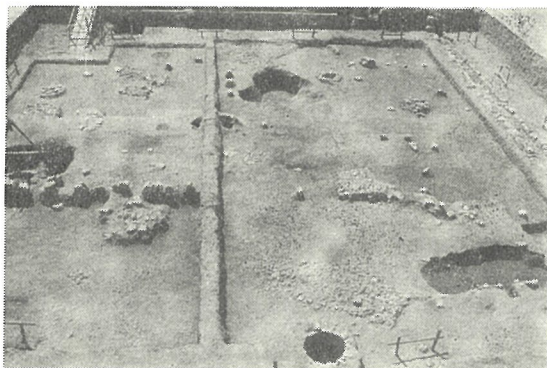
今出川と今出川街

寛延三年（一七五〇年）に刊行された皇州緒餘撰部中古京師内外地図や、宝暦三年（一七五三年）の皇州緒餘撰部中昔京師地図は、数多い京都に関する古絵図の中でも、中世までの状況をうかがうことのできる絵図として知られている。もとより正確な測量を基礎にして製作されたものでないことから、絵図上に記載されているすべてを、現在の地点に対応させて限定し得るものではなく、他と比較して多くの手がかりを与えてくれるといった

類のものである。

絵図の中の「今出川」についても同様である。現地に即して、今出川の流路を決定的に示すことはできないが、この流れについての概略を読み取ることは可能である。現在、今出川といえば御所の北を東西に走る今出川通りを指すのが一般的であり、ときには地下鉄の駅を指したり、同志社の今出川キャンパスの代名詞としてさえ使われている。今は、決して「川」の名称として使われることはない。しかし、往時には「川」として四季折々の風情を添えて水を流していたのである。

中昔京師地図の付記には、今出川南流東洞院因テ東洞院ノ一条以北曰今出川街今為東西街之名其水源自雲叢中津川流來右所謂南流故今出川街東折而南流京極街謂之中川二条東折入賀茂川又二条ヨリ以南南流京極街謂海抄所謂至六条流ルハ近年事也云々とあり、中古京師内外地図とともに南流する川筋が描かれている。今出川は、およそ雲が畑から南へ流れて、上御霊神社の西を通り、相国寺を経て東に折れ、更に南へと流れて二条で賀茂川に合流する川筋として理解できる。まさに今出川は、「川」として人々にかかわっていたわけ



出土した藤谷家の石組側溝と礎石群、大学明德館より望む

であり、応仁の大乱時には、東軍の本陣の脇を流れて、歴史の舞台となったわけである。

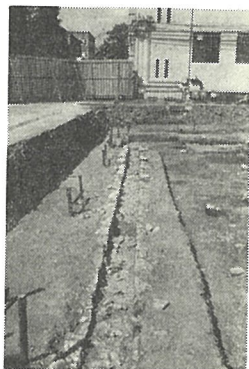
中昔京師地図の付記にみる「今出川街」は江戸時代に入ってから公家屋敷群によって構成されていたことが、多くの資料で知られていて、寛永十四年（一七三七年）の洛中絵図では、御国母様下屋敷であったところが、後の宝永五年（一七〇八年）の絵図では二条

家と伏見宮家になるなど、公家屋敷の配置替えもうかがえる。公家町としての「今出川街」は、秀吉による町割りを基礎としながら、江戸時代に入ってから更に整備されて、公家町として定着したことになる。この公家町としての今出川街の公家屋敷も、近代に入って次々と姿を消し、今は本邦唯一の公家屋敷として、重要文化財に指定された「冷泉家」を残すのみである。

公家屋敷の火災と洪水

同志社の今出川校地は、大学、女子大、女子中高校、幼稚園を含めて、そのほとんどが公家屋敷の位置に相当している。冷泉家を挟んで、西側の藤谷家、徳大寺家、竹内家、東側の山科家、伏見宮家、二条家などである。冷泉家を除いて、これらの公家屋敷についてはすでにそれぞれの屋敷の一部を対象として発掘調査がおこなわれた。

発掘調査によって、多くの遺構・遺物が検出されているが、それぞれの屋敷跡を通して共通する堆積物に、焼土層と砂礫層がある。焼土層は、火災後の整地層であり、砂礫層は洪水によって押し流されて堆積した砂礫から



出土した公家屋敷藤谷家の石組側溝、江戸時代

成っている。広範囲に分布する焼土層は、江戸時代についてみると二枚あって、宝永五年（一七〇八年）と、天明八年（一七八八年）の京都大火に合致するものと考えられている。それぞれの火災直後に刊行された「京都大火之図」をみるまでもなく、今出川街の公家屋敷は、火の海と化したはずである。赤味をもった煉瓦色の焼土層の堆積は、その広がりとともに大火の恐ろしさを示してくれる。ときには、石積みみの井戸の花崗岩さえ、大きく変色し、建物の礎石まで赤黒く変化した状態が出土する。

火災の恐ろしさと合せて、洪水にも大いにうろたえたことであろう。二枚の焼土層の間には、砂礫層が厚く、薄く、何枚にも分層できる状態が確認される。日本災異志に収録さ



精思館地点で出土した五輪塔ほか

れている洪水の記録のうち、十八世紀の鴨川の洪水をひろい上げてもかなりの回数にのぼるが、特に、正徳五年（一七一五年）、享保十三年（一七二八年）、元文五年（一七四〇年）、寛保二年（一七四二年）、延享元年（一七四七年）、明和八年（一七七一年）、安永七年（一七八八年）などの洪水は、多くの災害をもたらしている。元文五年（一七四〇年）

の記録をみると、六月九日京都大風雨洪水ニテ三条大橋破損、四条下宮町石垣町東西ノ民家ハ二階マテ満水、二条河原東新地ハ水高キコト六尺……とあり、寛保二年（一七四二年）の記録には、京都三条大橋流レ墜チ堀川ノ石垣崩ルとある。今出川街の公家屋敷にも、多くの災害を与えた洪水は、ときには、井戸さえ埋めつくしてしまう程であつて、静かに堆積している出土の砂礫層は、無言のうちに災害のむごたらしさを示している。

火災や洪水にあつても、永々とその位置を変えないまま出土する遺構もある。土地の境界にかかわる構築物である。精思館地点で検出した石組み側溝などは、その好例であり、現在でもなお、無言の主張を秘めている。藤谷家の屋敷の西側の境界を示す石組みの側溝であり、十七世紀の後半から二十世紀に入っても使われている。部分的に補修され、災害を受けてもいち早く生き返つたに違いない。この石組みの側溝は、その西側を「ヤリ辻子」として南北の道が通つていて、北に向へば薩摩藩邸にとりつき、南へ行けば京都御所の乾門に通じる路である。古絵図にもしばしば登場する道であり、幕末においては歴史の

舞台の一つの軸でもあつたわけである。

廃棄された五輪塔や、築地屏の瓦、美濃や伊万里産の陶磁器に加えて、灯明皿などを出したこの側溝は、昭和十四年（一九三九年）に、同志社が藤谷家から土地を購入した後も、その直上を排水溝として使用していたものである。発掘調査によつて確認される歴史的な変遷は、多くのことを遺構・遺物を通して我々に語りかけてくれる。古絵図にみられる土地利用の移り変わりも、古記録にみえる水の流れや災害までも、出土資料とのつきあわせによつて、その実体を浮き彫りにされるわけであり、ときには発掘資料が判断のかなめとなる場合すらある。

冷泉家が重要文化財に指定されるに當つて、出土した藤谷家の石組み側溝の北端部が、当初の冷泉家の屋敷の北辺を想定する上で重要なはたらきをしたという。大正六年（一九一七年）市電の開通によつて、北側へ後退した現在の屋敷ではなく、公家屋敷の当初の地割りを知る上で、隣接した精思館地点の出土資料が無言の主張をしたことになる。（同志社大学校地学術調査委員会調査主任）